2015 年 1 月 3 0 日発行
セブンスデー・アドベンチスト石川教会付属　石川三育保育園

アメリカの心理学者であったスタンレー・ミルグラムは、自身が教鞭をとっていたイェール大学で、「罰が学習に与える影響」を調べる実験をしています。実験のために、実験者（生物学教師が担当）、被験者（ニューヘイブン市民から選ばれた 40 名の人々）、被害者（訓練を受けた役者が担当）が用意されました。実験の内容は次のようなものでありました。

先ず、被験者が問題を読み上げ、被害者が答えます。もし、被害者が間違えると、罰として被験者が被害者に電気ショック（15V から 450V まで範囲）を与えます(実際には電気ショックはなく、被害者は苦悶の演技をしているだけ)。実験者は、被験者に、誤答が続くと次第に電圧（15V ずつ）を上げるよう指示し、被害者は苦悶の訴えを強くしていくという手順で行われ、どれだけの被験者が、どの時点で、実験の継続を拒否するかに着眼点が置かれていました。実験の結果、被験者 40 人のうち、26 人は最後まで実験者の指示に従って、最大の電気ショックに達するまで被害者を罰し続けたそうです。

ここまでの内容をお読みになった方は、この実験は単純に「罰」の良し悪しのことを言っているのではないことに気がつかれたと思います。この実験の本当の目的は、「権威者に従う、人間の心理状況」を調べることにありました。この実験で確認したかったものは、「人は、権威者に従う傾向がある」ということです。しかし、ただ単に「権威者に従う」ということを確認したいのではありません。たとえ、良心の呵責を憶えてしまう程の理不尽な権威者からの命令であっても従ってしまうことにあったようです。簡単に言うと、「命令されたらどんな残虐行為でもやってしまう」という人間の心理状況です。

実験の結果にも、この傾向がはっきりと表れていました。ここには、「命令されたからやったのであって、私には責任がない」という思いや、「このような罰を受けてもしょうがない人だ」という思い等が被験者の中に見え隠れしているように思います。昨今、世界各地で起きているテロは、このような思いに支配された人々によって引き起こされたのではと思えてなりません。もしかすると、私たちの身近で起き続けている「いじめ」もこれと同様な思いに取りつかれた結果ではないでしょうか。

良心に反することを行ってしまうこの現実があるということは、何と不幸なことでしょう。聖書にも、「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」（ローマ 7:15）と使徒パウロの心のうちを赤裸々に記しています。また、「そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。」（ローマ 7:17）とその原因を明らかにしています。そして、聖書は、そのジレンマから救われる道として「今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。」（ローマ 8:1）と証しているのです。キリスト・イエスが言われた、「あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ 15:12）という思いが、私たち内にありますよう祈ります。

園長　糸数正義